



## 4 説明文からつながる「書くこと」「書くこと」

これまで三回にわたって、「読むこと」の基本的な教材研究の手順について述べてきました。①一人の読者として作品全体を味わう読みから、②学習の手引きを参考に、学習主体である児童の立場を想定した読み、さらに、③指導者として単元のねらいを達成させるための授業のポイントを明確にする読みという三段階で進める方法でした。

今回は、少し趣向を変え、「説明的な文章からつながる論理的な文章表現力の指導」について考えてみたいと思います。

近年、論理的な文章表現力の育成が強く求められています。小学校段階でその基礎をしっかりと身につけさせるには、「読むこと（説明的な文章）」単元とそれに続く「書くこと」小単元の意識的な指導、有効活用が必要です。

光村図書の教科書では、入門期（第一学年）を除いた各学年の十一月頃に「読

むこと」との関連を図った「書くこと」が位置づけられています。

|    |   |
|----|---|
| 二年 | … しかけカードの作り方（読む）<br>おもちゃの作り方（書く）        |
| 三年 | … すがたをかえる大豆（読む）<br>食べ物のひみつを教えます（書く）     |
| 四年 | … アップとルーズで伝える（読む）<br>「仕事リーフレット」を作ろう（書く） |
| 五年 | … 天気を予想する（読む）<br>グラフや表を引用して書く（書く）       |
| 六年 | … 鳥獣戯画を読む（読む）<br>この絵、私はこう見る（書く）         |

教科書の説明的な文章（説明文）は、世にある他の読み物に比べ、内容の確かさに加えて、表現や構成の巧みさ、発達段階に応じた論理展開のみことさなど、言葉の学習の教材とするための条件が整っています。内容はもちろん、その書きぶりにも目を向け、自分の表現に生かす学習活動につなげることは、児童の論理的な文章表現力の育成に非常に有効で

す。説明文の読みで学習したことを「書くこと」につなげていく方法、学年間での系統性のもたせ方など、低・中・高学年に分けて具体的にみていきたいと思います。

### 低学年

学習指導要領、低学年「読むこと」の「説明的な文章の解釈」には「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の全体を読む」、「書くこと」には「自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考える」という指導事項があります。

二年「しかけカードの作り方」の単元名は「読んで、せつめいのしかたを考えよう」。いわゆる手順書の分かりやすい説明のしかたを見つけることが学習の目当てです。完成写真が冒頭に示され、児童がゴールのイメージを明確にもつこと

ができるようになっていきます。

文章の構成は分かりやすく、「まず」「つぎに」「それから」「こんどは」「やがて」「これで」と、順序を表す言葉、まとめる言葉が使われています。

いっぽう、続く「書くこと」小単元は、「おもちゃの作り方（分かりやすくせつめいしよう）」です。この時期の児童はまだ語彙が少なく、工程が複雑なものについては、順序の整理が困難となる場合もあります。手順を書かせるときには、絵や写真を使って構成を大枠で捉えられようにする支援が必要となりそうです。説明文「しかけカードの作り方」での学習と、教科書P40・41の作例を踏まえると、書くときに押さえておきたい点が次のように見えてきます。

**初め**… 作ったものの紹介（写真）  
**中**… 用意するもの（箇条書き）

作る順番 順序を表す言葉  
手順のキーセンテンス＋写真  
**終わり**… 作ってみての感想や遊び方

順序を表す言葉は、「しかけカードの作り方」や作例にある以外にも、「最初

に・初めに・二番目に・三番目に・さらに」などがあります。場に応じて、こうした言葉を増やしていくのは大切なことです。中・高学年にも、これらの言葉を使いきれない実態があることは、経験上、皆さん納得のいくことでしょう。既習事項として教室に掲示する、言葉のファイナルとして一人一人の児童に持たせるなどといった指導が必要です。「ここまでが低学年、ここからは中学年」という具合に区切りがあるわけではありません。繰り返し活用させたり思い出させたりすることで、言語能力は少しずつ定着していくものであることを大事にしたいものです。

「初め・中・終わり」の構成が論理的文章の基本であることについても同様のことがいえます。「中」をどう膨らませるか、中心をどこにもってくるか、効果的な表現をどう使うかなどというように、発達に即し、学年が上がるに際してさまざまな言語技能が付け加わることは当然ですが、基本は「初め・中・終わり」の構成であることを繰り返し体験的に学ばせ定着させることが大切といえます。



▲2年下「おもちゃの作り方」



▲2年下「しかけカードの作り方」

第三学年の説明文「すがたをかえる大豆」は、東北大学大学院教授の国分牧衛氏、第四学年の「アップとルーズで伝える」は、アートディレクター・NHK解説委員の中谷日出氏による教科書のための書きおろし文章です。それぞれ、直後に「食べ物のみみつを教えます（れいをあげてせつめいしよう）」と『仕事リフレット』を作ろう（写真と文章で説明しよう）という「書くこと」小単元が置かれています。「読むこと」で学んだことを「書くこと」で活用するには、各単元・小単元をどう捉えればよいのでしょうか。

ここで注目したいのは、説明文単元の単元名。どちらにも「説明のしかたを考える」ことが掲げられています。書かれている内容を読み取るだけではなく、「この分かりやすさには、どんな工夫があるのか」「読み手が引き付けられるのか」といった書きぶりからか」という観点から教材に向き合うことが児童に直接示されていること。ここがポイントでしょう。

読むための時間数は七〜八時間の設定です。詳細に読み進めるには十分な時間とはいえないかもしれませんが、だからこそ、ねらいを絞って指導する必要があります。学習指導要領にも「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の

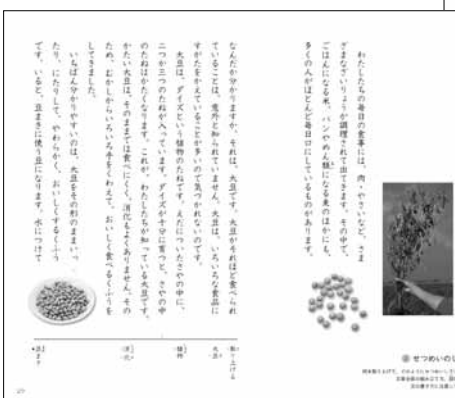
関係や事実と意見との関係を考え、文章を読む」という指導事項が示されています。特に、「書くこと」に生かすという視点から捉えると、「すがたをかえる大豆」では、例が書かれている段落を中心にして、その前後の段落との関係に留意しながら読むことが大切です。

さらに、「初め・中・終わり」という構成を確認し、「中」部分の五つの段落における具体的な食べ物例の書き方に気づかせます。そして、それがなんの例なのか整理してタイトルを付けたり、順序性を考えたりさせます。また、「このように」というまとめの言葉が使われていることに気づかせ、児童にとって「書く」(表現する)ための新しい言葉の力の獲得につながるように意識づけていきます。

いて考えをまとめる」学習が児童に示されています。

説明文の筆者は、高等学校教諭・気象予報士の武田康男氏。表・グラフ・写真・図が内容の理解を助ける文章であり、「どうして〜でしょうか」「では、〜でしょうか」「それでは、〜でしょうか」という三段階の問いかけの文と、それに対する「一つは」「もう一つの理由は」「一つの手立ては」といった理由づけの表現が効果的に用いられています。「問いと答え」や「原因と結果」など、段落相互の関係を考えながら読み進める力を身につけることは、「たんぼぼのちえ」(二年以上)など、低学年から繰り返し学び続けていることの延長線上にあるものです。この説明文の読みを受けて設定されているのが「書くこと」小単元「グラフや表を引用して書こう(理由づけを明確にして説明しよう)」です。教科書P140・141では、作例に添えるように、(グラフや表を説明するとき)へ理由をうらづける資料)などの内容がオレンジ色の点線囲みで示され、児童の自主学習に生かせるのであります。

アップとルーズで伝える



▲3年下「すがたをかえる大豆」

高学年

五年を例に取って考えてみます。「説明のしかたについて考えよう『天気予想する』」では、「筆者の説明の工夫について

学習指導要領、高学年「書くこと」には「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書く」という、記述に関する指導事項があります。本小単元では、この項目を充てた言語活動が設定されています。

つまり、直前の説明文の書きぶりが大いに参考になるのです。児童自身がそのことに気づくことができるような学習展開を意識するとなおよいかもしれません。

このように見てくると、論理的な文章表現力の育成には、「読むこと(説明文)」の意図的な活用が効果的であることが分かってきます。教科書では、それぞれの単元・小単元内に、分かりやすく説明するための工夫——オレンジ色の点線囲みや「たいせつ」にある内容——が明示されています。それらを書き抜く、サイドラインを引くなどの活動を積極的に取り入れ、児童に「書くこと」の能力を支える言葉の力を蓄積させたいものです。ここに紹介した説明文の他にも「書くこと」の能力育成を意識して教材研究していただくことを勧めます。

▼5年「表やグラフを引用して書こう」



▼5年「天気を予想する」

